

No. 883

# シーズン到来

—北海道・東京—

札幌冬季オリンピックまであと400日。ブレ・オリンピックも来年2月と間近に迫って札幌市内の競技施設は今や急ピッチで工事が進んでいます。

美香保公園の屋内アイスホッケーリンクは、一足先に完成。一般市民に開放されています。

一方、東京では、来たるべきオリンピックを前に少しでも、ウィンタースポーツに親んでもらおうと中日新聞社主催のスケート教室が開かれました。参加者もほとんどが初心者で、早く氷に慣れようと、真剣な表情。まさに、シーズン到来といったところです。

# じぞうひわ 地蔵悲話

—茨城・東京—

全国各地で増えつづける交通事故。その度に残された家族は悲嘆にくれる。あちこちの街道筋に、一体、又一体と地蔵が建っていく。

お地蔵さん、何視てござる。無言のまま。無言のまま。

その昔、旅で死んだ人の霊をとむらい、旅の安全を願い建立されたお地蔵さん。

現在では、くるま暴力の犠牲者の塚なのだ。

ここ茨城県真壁町のある石材工芸所では、コンクリートとみかげ石を材料に大量の地蔵さんがつくられていく。各地の事故現場で死者のめい福を祈るために。

昭和40年からつくりはじめ、その頃、月約30体出荷されていたものが、今では約100体が送り出されるという。それだけ交通事故による死者が増えたのだ。

ある雨の日、一人の青年が死んだ。トラックと正面衝突で即死。新聞の社会面の片隅に小さく報じられた。今から四年前である。彼は27才であった。山が好きだった彼。スポーツマンで誰にも親切だった彼。結婚を約束した人もいたという。彼の命は一瞬のうちに消えてしまった。

彼の人生は今アルバムの中にしかない。

お母さんは一体のお地蔵さんを買って求め、事故現場に建てた。そして、深々と頭を垂れ祈った。もう交通事故による不幸な人を出してはならないと思いながら。

「交通事故をなくそう」この言葉はいつくされる程いわれてきた。

しかしこの言葉の重みを人ば自分の身にふりかかってはじめて知る。

お地蔵さん、何視てござる。もうこれ以上、地蔵悲話をつくってはならないのだ。